修士論文（要旨）
2016 年 7 月

日本語学校における教室活動の役割
-学習ストラテジーを取り入れたタスクベース授業を中心に-

指導　宮副ウォン　裕子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
213J3024
朱　胤

Master's Thesis (Abstract)
July 2016

The Role of Classroom Activities in Japanese Language Schools: Focusing on Task-Based Language Teaching Incorporating Learning Strategies

Yin Zhu
213J3024
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe Wong

目次

第 1 章　はじめに **1**
1.1　研究背景 1
1.2　研究目的 3
第 2 章　先行研究 **4**
2.1　タスクベース授業 4
2.2　学習ストラテジー 6
第 3 章　日本語能力についてのニーズ調査 **8**
3.1　社会的ニーズ調査 8
3.1.1　調査概要 8
3.1.2　調査結果 10
3.2　学習者ニーズ調査 14
3.2.1　調査概要 14
3.2.2　調査結果 16
3.3　調査結果のまとめ 21
第 4 章　タスクベースの実践授業 **24**
4.1　実践授業の概要 24
4.1.1　実践授業の協力者 24
4.1.2　実践授業におけるタスクの設計 25
4.2　授業後のインタビューによる分析 29
第 5 章　総合的考察 **35**
5.1　学習者の学習についての変容 35
5.1.1　学習行動における変化 35
5.1.2　協働活動による学び合い 36
5.2　タスクベーズ実践授業の役割 36
5.2.1　課題達成による学習意欲の向上 37
5.2.2　支援者である教師による自律学習の育成 37
第 6 章　まとめおよび今後の課題 **38**
参考文献
巻末資料

本研究では、稿者自身の経験から、日本の日本語学校で学ぶ学習者は日本語学習者であると同時に日本語使用者でもあることに視点を置き、日本語学校における教室活動はどのような役割を果たすべきなのかを検討した。

日本語学校で学ぶ学習者は日能試や進学試験に合格しても、教室外での実際使用場面における日本語運用能力が不足していることを自覚しており、教室内で日本語運用能力を高めることを希望している。近年、日能試は学習者の持つ言語知識を測定することはできるが、実際の言語運用能力を測るには限界があることが認識されている（宮副ウォン 2006）。そのため、現在、日本語学校においても、試験対策講義から、学習者の日本語運用能力の向上を目指す教室活動に注目がされつつあるが、より学習効果がある教室活動は現在のところ少ないという。なぜなら、明確な学習目標を設定しないで、教室活動だけを単に教師主導の一方向的な講義から学習者中心の活動に変えたとしても、学習者同士が双方向的かつ協働的に課題を達成する過程で、言語を使いながら言語能力身につけるような教室活動には、必ずしもならないからだと考えられる。また、宮副ウォン（2006）は旧日能試 1 級合格後に目的を失ってしまう学習者が継続学習できるよう、学習ストラテジー（以下、学習 ST）の使用にも焦点を当てる重要性を主張している。

このことから、本研究では、学習 ST の概念について指導し、それを意識化した上で，学習ニーズに応じたタスクを設定し、目標言語を実際の目的のために使用する機会を与える実践授業を実施した。これは言語を使用しながら学習を促進することにより、学習意欲につながり、その結果教室外での自然なコミュニケーション以上の学習効果が期待できるという特徴を持つタスクベース授業（Task-Based Language Teaching、以下、TBLT）（小柳 2013、百濟 2013、三浦 2012）である。研究の目的は、①日本語能力のニーズに応じたタスクベースの実践授業後、学習者の学習はどのように変容するのか、②日本語運用力の向上を目指すための学習ストラテジーを取り入れたタスクベース授業は学習にどのような役割を果たすのか、という 2 点を明らかにすることだった。

実践授業の計画をする前に学んだ TBLT の理論から、学習者の学習ニーズに応じたタスクを設計すべきことが分かった。また、宮副ウォン（2006）が、教室外での社会参加においては、言語能力のみならず、社会からの要求を把握すべきと指摘していることを受け、先行研究から得られた知見に基づき、本研究では、日本語能力についてのニーズ調査を「社会的ニーズ調査」および「学習者ニーズ」に分け、日本語能力ニーズ調査を実施した。調査結果から、求められている日本語能力とは、①「異文化接触場面の意味交渉能力」、②「実際使用場面での課題達成能力」、③「社会活動場面の学習継続能力」の 3 つの能力であることが明らかになり、その結果を TBLT 実践授業におけるタスクの設計に生かした。

TBLT の理論に基づき、学習者に対する実用性および日本語学校でのタスクの実行可能性に配慮したうえで、宮崎（2009）の学習 ST を活かしたタスク事例を参考にし、「贈り物のマナー」を話題とし、「相手に分かりやすく伝える」を学習目的とした TBTL 実践授業を実施した。授業後のインタビューによる分析結果をもとに、学習 ST を取り入れた TBLT 実践授業を通じて発生した学習者の学習についての変容、および TBLT 実践授業の役割についての考察を行った。

TBLT 実践授業では、タスクを明示された協力者は学習目的を達成するため、積極的にタスク活動に参加し、学習意欲も向上したことが明らかになった。学習 ST を取り入れたことで、協力者が自ら「問題対処」、「自己評価」の行動を行い、タスクという目標を達成したか否か、さらに次の学習ステップに進むための学習計画を立てるという流れになった。このような形が定着すれば自律学習が実現できると言える。また、協力者が話題を手掛りに、ある者は新たな知識を得、ある者は既有の

知識を共有しようとしたことで、教室内で現実の場面に近い、実際の言語運用場面ができた。教師の与える知識を一方的に受け取るような学習から協働学習への変化になり、学習意欲が引き出されたと言える。

TBLT 実践授業の役割としては、課題達成による学習意欲の向上が期待されている。また、課題達成の過程で、学習者が相互に自力だけで意味交渉を行うことで、言語産出能力の向上も期待された。本研究の実践授業では、学習者間の相互作用による協働学習が促進され、自分の理解を見直す契機ももたらされた。TBLT は教師依存の学習から抜け出すきっかけとなり、それが自律学習へと踏み出す一歩となる可能性があると言える。

参考文献

池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門-創造的な学びのデザインのために-』ひつじ書房

許明子・金東奎・姚艶玲（2014）「中級レベルの日本語学習者のコミュニケーション能力の現状とニーズ：日本・中国・韓国の学習者対象とした調査と実践を通して」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29、pp.1-17

近藤安月子・小森和子（2012）『研究社　日本語教育事典』研究社

近藤ブラウン妃美（2013）「日本語評価のためのタスク型アチーブメント・テスト」『第二言語習得・言語教育からみた「タスク中心の教授法（TBLT）」』16、pp.56-73

小柳かおる（2013）「タスクによる言語学習が第二言語習得にもたらすインパクト-インターアクションおよび認知的な観点から見タスク-」『第二言語習得・言語教育からみた「タスク中心の教授法（TBLT）」』16、pp.16-37

百濟正和（2013）「TBLTの日本語教育への応用と実践-タスク統合型の言語教育デザインに向けて-」『第二言語習得・言語教育からみた「タスク中心の教授法（TBLT）」』16、pp.74-90

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法 ： 原理・方法・実践』新曜社

塩澤真季・石司えり・島田徳子（2010）「言語能力の熟達度を表す Can-do 記述の分析 ： JF Can-do 作成のためのガイドライン策定に向けて」『国際交流基金日本語教育紀要』 6、pp. 23-39

田丸淑子（2003）「外国語教育におけるタスクをめぐる問題 - 日本語教育の教師の視点から - 」『Working papers』13、pp. 59-69

原山有希 （2013）「採用時における外国人留学生の評価について-「国籍に関わらず優秀な人材を採用」している企業の場合-」『日本語教育方法研会誌』第 20 巻第 1 号 1、p.6-17

平田友香（2015）「タスクベース授業における教師の役割と指導方法」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』6、pp. 35-66

三浦もと子（2012）「タスクベースの授業向上を目指して」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』3、pp.250-265

峯布由紀（2013）「第二言語習得・言語教育からみた「タスク中心の教授法（TBLT）」-イントロダクション-」『第二言語習得・言語教育からみた「タスク中心の教授法（TBLT）」』16、pp.5-15

宮崎里司（2009）『タスクで伸ばす学習力 - 学習ストラテジーを活かした学びの設計』凡人社

宮副ウォン裕子（2006）「日本語能力試験の波及効果-香港の調査から-」『世界言語テスト』第 12 章、pp.227-250

J.V. ネウストプニー（1999）「言語学習と学習ストラテジー」宮崎里司・J.V. ネウストプニー共編『日本語教育と日本語学習―学習ストラテジー論にむけて―』くろしお出版、3－21